

# 村上春樹の『ノルウェイの森』と衛慧の『上海ベイビー』の比較考察

許 翠微

(浙江外国語学院)

**要旨：**村上春樹は現代日本作家として世界各国に注目されている。多くのヒット作を彼は持つが、中でも『ノルウェイの森』が最も人気が高い。研究界においては近年、『ノルウェイの森』との比較研究や、この作品の影響を受けて書かれた作品に関する研究も多く見られる。本論文においても村上春樹の作品の影響に注目。中国の女性作家・衛慧が書いた『上海ベイビー』を取り上げる。両作品の創作背景、目的、内容面に関して、先行研究を踏みつつ、類似性を探る。  
**キーワード：**比較研究 村上春樹『ノルウェイの森』 衛慧『上海ベイビー』

## はじめに

現代日本作家・村上春樹は 2009 年から 9 年連続してノーベル文学候補として注目されてきた。彼は 1979 年『風の歌を聞け』でデビューして以来、世界の文学賞を多く取り、ヒット作も次々と産み続けてきた。中でも人気が高いのは 1987 年に出版された『ノルウェイの森』である。『ノルウェイの森』は累計 1000 万部を超える超ベストセラーとなった作品である。日本だけでなく、世界何十各国の言葉に訳され、世界各国の文学に影響を及ぼしていると言ってよい。中国でも例外ではなく、彼の作品は発売されて以来、世代を超えた読者に愛読され、また多くの作家の創作活動にも影響を与え続けている。

村上春樹に何らかの影響を受けていると思われる作家としては、かつて「現代美人作家」と言われた衛慧がいる。彼女の代表作『上海ベイビー』は 50 ヶ国以上で翻訳出版され、注目されている。作品中、主人公の性格から経験まで『ノルウェイの森』と似ている部分が散見される。それに関して衛慧は、中国文学研究者藤井省三と対談した際（2004 年）、「『ノルウェイの森』を一九九九年に読みました。確かに、村上春樹さんは非常に素晴らしい作家だと思います。言語といい構造といい、テクニクのようなものが素晴らしいと思います。だけど私は、自分でもなぜか分からないんですが、彼に対する接点みたいなものが、何か欠けているような…」と村上からの影響を否定した。しかし、藤井省三は（2008 年）論文『中国の村上チルドレンと村上春樹小説の「家族の不在」』に

「村上チルドレンとしては先ず衛慧を挙げられよう。」と述べている。また、論文中で、「98年村上ブームの洗礼を受けたのちの小説『上海ベイビー』は、中産階級の主人公たちといい、三角関係といい、村上作品を彷彿とさせる小説である」とまで言及している。本人が否定したことを承知しながら、藤井氏が論文の中で衛慧の小説に対する村上春樹の影響を指摘しているという事実は非常に興味深い。

本稿では先行研究を踏まえながら、両作品の創作背景や特徴、作品内容の異同など詳細に紹介、その影響関係について考察する。

## 第1章 衛慧と小説『上海ベイビー』

衛慧（本名周衛慧）は1973年中国浙江省に生まれた。上海の名門復旦大学の中国文学科卒業後、新聞記者、編集者、テレビの司会者、ウェイトレスなどの職を経たのち、小説家となって『上海ベイビー』などの長編小説や短篇小説を発表した。『上海ベイビー』の出版当初は多くの新聞が「新人類」だの「美女作家」だのと衛慧のことを褒めたが、発禁後には、あまりに前衛的で、あまりに反抗的だと言い出した。

さて小説『上海ベイビー』のあらすじは以下のようなものである。主人公ココは、全中国でトップランキング大学のひとつである上海の復旦(フダン)大学を卒業した聡明で才能豊かな20歳台前半の若い美しい女性。短編小説などを書きつつ、コーヒーショップでアルバイトをしている。その頃、長身で美しくナイーブな年下の青年・天天と出会い、一緒に暮らすようになる。しかし天天は性的不能者だった。ココはある日、上海のコンサルタント会社に勤務しているドイツ人マークと出会う。ヨーロッパの美男子を絵にしたような男で、知的にも身体的にも恵まれた彼と、たびたび情交を持つようになる。しかし、ココが心から愛するのは天天だけであった。お互いに深く理解し愛し合うココと天天の関係は、幸福であるとともに双方にとって大きな重荷ともなる。天天は、ココのために性的能力の回復を求めて病院に行った。しかし、そもそもそういう治療自体が天天にとって大きな負担なのだった。上海が憂鬱になる冬期、天天は避寒地海南島に行って、ひとり暮らしを始める。ココはお互い窮屈になっていることを理解し、双方にとって分かれて暮らす時期も必要だと考え別居に同意する。ひとりである間、ココはマークとまた密会するが、実はその間に、ナイーブで世間知

らずの天天が悪い友人に騙され麻薬に浸るという事件が起きる。事態を知ったココは海南島に駆けつけ、苦勞しながらもとにかく天天を上海に連れ戻す。天天は社会復帰のためのリハビリセンターに収容されるが、その間に天天の母が来る。天天は、父が死んだのは母のせいだと思い詰め、10年前から母と別居していた。母はスペインで恋人とレストランを営んでいたが、上海に新しい店を設立すべく、恋人を連れて上海に来ていたのだ。天天がリハビリセンターから帰ったあと、ココは天天とふたたび一緒に暮らすようになるが、マークとの性的交渉はもはや止められないものとなっていた。天天は悩み、ふたたび麻薬に溺れる。そしてついに天天は麻薬による死に至る。同じころマークも転勤でドイツに帰国してしまう。恋人を両方とも失ったココは、一体自分はどのような存在なのかと自問する。

『上海ベイビー』は作者の体験が元になっている。もともと小説家を志したきっかけは、それまでに経験した恋愛を題材にして小説を書きたいという想いからだったという。

私の世代の女性は、男性と変わらないチャンスを手に行けるようになった。私のように十分な教育を受けられるし、その結果としてきちんとした職に就くこともできる。女性の方がたくさん稼ぐことだってある。彼女たちは経済的に自立しているから、思考の面でも自立できるし、セックスの面でも自立できるのである。以前は「この男性はお金持ちだからセックスしよう」とか「権力があるからセックスしよう」とかというように考えたかもしれない。でも今は「セクシーだから」という理由でセックスすることもある。それに、何人の男と寝たかで、自分が強くて成功した女性かどうか、どれだけモダンな女かなど計ろうという人もいる。これは、20代の、教育もあって、経済的にも自立した女性である。良い悪いは別として、それは当時の客観的な現象である。一方、上海という都市には1930年代に始まる二つの伝統がある。一つは、西洋の影響を色濃く受けた、ファッションナブルでモダンな植民地の文化。ジャズのような音楽やアリスクリューム、パン、ケーキといった食べ物は随分早くに西洋からもたらされ、上海に根づいています。私は、小説という形式を借りて、上海の歓楽を求める。放蕩三昧の風俗を表現しようと思いました。これは、実際に昔から上海にあっ

た、偽りなき上海文化の一部だと、みんなに思い出して欲しかった。

衛慧氏は2000年に「中国で発禁『上海ベイビー』私が書いた」という文章の中に以上のような内容を書いた。続く第2章では村上春樹『ノルウェイの森』との類似点を分析する。

## 第2章 『ノルウェイの森』の影響を受けた内容

『上海ベイビー』には村上春樹の『ノルウェイの森』との明らかな類似点が存在する。それは一つには主人公の生活ぶりである。『ノルウェイの森』のワタナベはアメリカ小説を読むのが好きで、暇に明かしてワインやコーヒーを飲みながら、西洋の音楽を聴き、アメリカの小説を読む。『上海ベイビー』の主人公ココが使っている日常用品、鞆や服や香水なども全て西洋のブランド品である。飲食も同じくコーヒーやワインで、週末、家でホームパーティーをったりする。彼女はドイツ人の恋人まで作った。2作には根底的に西洋文化の強い影響が指摘できるのである。

次に、登場人物の経験も酷似している。『ノルウェイの森』の直子は小さい時、大好きな姉の自殺でショックを受ける。成長して恋人と愛し合っているにもかかわらず、深い関係を契ることができない。恋人も（直接の原因は不明であるが、このことが少なくとも原因の一つとなって）自殺にまで至ってしまう。直子は結局残酷な現実を受け入れることができず、最後には自殺する。『上海ベイビー』の天天は幼少期に父を失い、母は海外に在住。その母の仕送りで祖母と生活している。スペインに母と会いにスペインに行った際、急に父が亡くなる。祖母の話によると、母が父を殺したという。このような不幸な環境で育った天天は結局性的不能となり、その苦しみに堪えられず麻薬に溺れて死に至る。主人公のワタナベとココは、2人とも心から愛している相手は性的不能であるため、この恋人以外の別の異性に好意を抱く。また小説の最後では最愛の恋人を失い、2人は自分も見失い「自分は今どこにいるか、自分は誰なのか」という疑問を抱えて途方に暮れる。

さらにもう一つの類似点として、主人公たちが過剰な性的経験を持っているという点を挙げることができる。『ノルウェイの森』では主人公のワタナベは、直子やレイコや知らない女のするなど親密な関係を持つ。唯一、緑とはそのよう

な関係には至っていないが、縁から頻繁に性に関する露骨な話を耳にする。友人の永沢も何十人という女性と肉体の関係を持っている。一方『上海ベイビー』の主人公のココは恋人の天天と親密な関係を持つことは不可能であったが、ドイツ人の愛人マークと会うたびにセックスに耽る。

### 第3章 両作品の比較研究

以上のような類似点を持つため、中国における村上春樹研究史の中には、衛慧『上海ベイビー』という名辞が散見する。日本においても衛慧について論じた論考はいくつかみられるが、2つの作品を並べ書くものは筆者の知るところでは存在しない。一方中国の論文を探すと3つの論文で中心的に扱われていることが分かる。以下この3論文を検討する。

最初は2004年「論ポストモダン小説の中の“孤独”感」（陳卉）である。この論文は「孤独」をキーワードとして、「個人と社会」、「愛と性」、「生と死」の3側面から登場人物の孤独の原因を分析している。「個人と社会」面では、『ノルウェイの森』において、当時学生運動が日本全国の学校に広がっていた背景を重視している。にもかかわらず主人公ワタナベは学生運動にも参加しない。またルームメイトの突撃隊とも理解し合うことがない。多くの物事に興味を示さず、自分の求めていることも分かっておらず、どうでもいいと考えている。そういう孤独感は当時の日本の若者たちの心象を典型的に現している。また、直子も孤独であった。肉親や恋人に死なれ、彼女は人と普通のコミュニケーションもできなくなってしまふ、社会から疎遠されたそのあり方を指して「社会との脱離」が原因だと論文中では述べられている。一方『上海ベイビー』の天天も両親の離婚、父親の死、自分の性的障害などの原因で人と交流もできず、信用もできず、社会から脱離してしまった。ココも個性的で、親にも理解されず、友達も少なく、同じ孤独な人間だと言することができる。故に、両作品の登場人物の孤独は社会によるものだと論考中では指摘される。また主人公たちの愛と性に統一感が存在しないことも主人公たちが孤独を感じる原因だと分析した。両小説の最後で主人公たちが身内や恋人と死別してしまうことも孤独の大きな原因であった。論考の結論で筆者は両作品の創作背景を述べ、それぞれ登場人物たちが生活する社会こそが彼らの孤独の元だと断定する。論文は両作品の異同を比べたというより、むしろこの両作品が同じポストモダンという時代背景を

元にかかれた作品であるため、同じ孤独感があったのだと強調した。

同じく 2004 年「消費主義下にいる弱い失語者—『ノルウェイの森』の直子から『上海ベイビー』の天天まで」（丁琪）という論文である。この論文は両作品が描いたのは都市青年の恋愛物語ではなく、消費主義社会で人の精神と物質の分離による苦しみや新しい価値観捜しの困惑と迷妄だと指摘した。そして、2つの小説の登場人物は非常に似ているが、作家の創作理念や表現手法が違うため、登場人物に与える意味が違くと筆者は指摘する。村上春樹は直子を 1 人の登場人物と描いたというより、1つの「記号」として特別な意味に与えた。また、同じメタファーとしての井や森、阿美寮などと一緒に作品の主題を強化した同時に、読者に深くまで考えさせた。その一方、衛慧の創作はポストモダンと言われ、芸術作品と日常生活の区別がなくなった。高尚文化と大衆文化の差もなくなり、即ち、その時代の文化は深みがなく、ただ日常生活をそのままコピーして文学作品にただけであった。筆者は村上春樹の「文章を書くという作業は、とりもなおさず自分と自分を取り巻く事物との距離を確認することである。必要なものは感性ではなく、ものさしだ。」という言葉を引用し、衛慧たちの所謂新人類作家の創作にはその物差しがなかったと指摘した。この論文は両作品の類似点を示したのみならず、両作品に対して非常に適切な評価を与えた論考であり共感できる比較論だと考えることができる。

最後に 2010 年「言語環境、身分、表現—村上春樹と衛慧の代表作への解読」（呉雨平）という論文がある。この論文ではまず、両作家の創作背景が詳細に分析される。村上の場合は、日本がちょうど西洋文化と日本伝統文化とが融合する時期に当たっていた。村上本人も外国で暮らす経験が豊富で、1人の旅行者でもあり、1人の作家でもあった。その2つの身分から、書いたものも多角度・多次元であり、多くの国の読者に受け入れられた。衛慧の場合は、中国が改革開放時期に入ったばかりで、上海のような国際大都市なら西洋文化がある程度受け入れるが、大部分の国民はそういう消費レベルにたっていなかった。そのため西洋風の消費方式を受け入れることもできなかった。衛慧本人は上海で暮らしたため、大学時代から西洋文化の影響を受け、特に西洋のライフスタイルへの憧れは作品の中にはっきり見える。それ故、衛慧の2つの身分は新世代作家である同時に、西洋知識豊富な「上海ベイビー」であると筆者は述べた。最後に両作家の作品中にポストモダンの影響があるか否かについて論じた。村上の場合

合、作品は反伝統で、東西方伝統的な概念を超える人生態度が見えるため、ポストモダンの傾向が濃いと言える。衛慧の場合、ただ当時中国の一部社会現象の真実反映で、一方的に西洋文化を崇拜する傾向が濃いと筆者は結論づける。この論文も2作品への解説が非常に深く、納得できる内容であった。

以上の比較論において、それぞれ独自の視角から両作家が分析され、両作品も比較検討されている。特にあとの2論文においては、衛慧の作品への批判も感じられた。しかし、どちらも衛慧の作品が村上の影響を受けたという明言は避けている。

#### 第4章 芸術品『ノルウェイの森』と日用品『上海ベイビー』

以上の作者自身の作品への解釈と研究者の研究を踏まえながら、両作品を再び比較考察しよう。まず、時代背景であるが、『ノルウェイの森』の場合は、日本は資本主義社会として、伝統を守りながらも西洋の経済や文化の影響を受けている。作家本人も海外生活経験も豊富で、外国文学の翻訳にも力を注ぎ、創作の中に西洋の生活スタイルがみえても、違和感がなく、受け入れられることが可能である。一方、『上海ベイビー』の場合は、衛慧自身が語ったように、当時の上海は国際大都市として、もともと西洋文化の影響を受けている。特に、彼女のような「ホワイトカラー階級」と呼ばれる女性たちは普段の生活は西洋スタイルであるのが普通である。それ故、彼女の作品の中にそのような西洋風の生活スタイルが出てくることは、特に村上作品の影響を受けなくても普通にできると思われる。しかし、当時の中国は彼女のような「新世代女性」、「新人類」が未だ少なかつたために、彼女の作品は「資本主義国家への憧れ」、「拝金主義」だと批判されてしまったわけである。

次に、作品の創作についてであるが、両作品とも三角関係や多くの「死」、過剰な性的描写などがあった。『ノルウェイの森』の直子と緑はそれぞれ「死」と「生」を代表し、主人公は二人の付き合いにより成長し、積極的に生きていくという解釈が可能である。作者本人もこの小説は「100パーセントの恋愛小説」であり、成長小説でもあるといったそうである。それに、性をきれいに表現するのも作者の創作意図であり、「死」を通して「生」の意識を強調するのも、この小説から理解できる。一方、衛慧の『上海ベイビー』の場合、作者本人の話によれば、この小説は自分の生活経験をもとに書いたものである。当時の上海女性は

男性とのセックスを通して自分の成功や「モテ」る程度を計っているので、小説の中に過剰な性的描写もその当時の生活のそのままの表現であろう。村上小説のようにメタファーがないとも思われる。主人公天天の死も麻薬の取り扱いによる死だったので、秘められた深い意味を推測することはできない。

最後に、両作品とも多くの国で翻訳され、ヒット作になったことについて考えてみよう。村上春樹の『ノルウェイの森』は小説全体に悲劇的雰囲気漂っている。主人公ワタナベの友達キズキの死から始まり、キズキの恋人直子の死で終わりというように「死」によって小説が貫かれている。しかし最後まで読んだ時、読者が感じ取るものは決して「死」ではなく、むしろ「生」に対する渴望であろう。また、各登場人物に対する生き生きした描写、個性のある行動、意味深い言葉なども小説の魅力である。更に、ストーリーの展開や登場人物の運命などを通して滲み出た当時の社会への批判意識もこの小説が今まで人気のある理由の1つだと考えることができる。要するに、村上春樹の『ノルウェイの森』は1つの芸術品のようなものである。それは時代が変わっても、そこから読者が得る感動や思考には変わることはない。

それに対して、衛慧の『上海ベイビー』は、小説全体に西洋資本主義の雰囲気が漂っていて、登場人物たちの言葉から行動まで隔々に洋風生活への憧れを表している。それは当時の大部分の中国人の価値観と背いている。また、大胆な性行動や麻薬に浸る行動など、中国人の意識の中では許されることではない。更に、主人公のココは天天と付き合う同時にドイツ人のマークとまた愛人関係を持っているなども道徳では許される行動ではない。故に、この小説は中国では禁発とされた。筆者も実は小説を読む当初そのような印象を持った。しかし、彼女の創作経緯を読んで、衛慧自身が当時の国際大都市としての上海に住み、流行を追かけるモダンな都会人だからこそ、本当の都市文化を描き出せたことが理解できた。またすべての人に否定されるのではなく、当時の彼女と同年代の若い女性読者の支持も受けたこと、加えて海外では非常に評価されてヒット作になったことも知った。衛慧の話によると、小説の中に出てくるバーやクラブ、パブは全て上海に実在するお洒落なお店などが、外国人にとって、「上海のトラベルガイドブック」ともなったのである。以上のように客観的に小説『上海ベイビー』を見ると、衛慧はただ当時の国際大都市上海で暮らしていた一部分の「新人類」と言われる人たちの本当の生活を書いたに過ぎないという事も可



能である。自身の体験を元にしたのであり、誰かの影響を受けて書いてものにならないのではないであろうか。紹介した諸論文でも言及されているように、彼女の小説は確かに深みが足りず、日常用品のようなものだと言ってよい。しかしそれは負の評価ではない。批判されると知りながら、大胆に当時の一部分上海人の資本主義風ライフスタイルを大衆の前に暴いたことは実に勇気ある行動であり、高く評価すべきものだと言えるのだ。

内容が酷似しているということによって、「日常用品」が「芸術品」よりも劣っているという論調は妥当であろうか。それは「日常用品」の存在意義を不当に貶める不公平な見方に過ぎない。作者本人が語った「村上春樹作品とあまり接点がない」ということの意味が理解できたような気が今、している。

## 終わりに

本論文は衛慧の小説『上海ベイビー』は村上春樹の小説『ノルウェイの森』の影響を受けたかどうかという小さな疑問をきっかけに、2作品中の類似と差異を、先行研究の成果を踏まえながら分析した。結論として『上海ベイビー』は日常用品であり、『ノルウェイの森』は芸術品のようなものであるという結論を通して、2つの作品の接点がないのも当然であるという筆者自身の結露を示した。しかしこれは、本文でも述べたように作家衛慧への批判ではない。

彼女は中国の新世代女性作家として、かつて大きな注目を浴びた。今後、衛慧のその他の長編小説を分析し、村上春樹作品との接点があるかどうかを更に探してみたい。また、実際に明らかに村上春樹の影響を受けた作家やその作品について研究を拡げるのも今後の課題としたい。

## 参考文献

村上春樹 1987 年『ノルウェーの森』（上、下）講談社

衛慧 1999 年『上海ベイビー』

卫慧 1999 年『上海宝贝』春风文艺出版社

衛慧；藤井省三（対談）2004 年新上海の“感性”を描く－『衛慧みたいにクレイジー』をめぐって；講談社

藤井省三 2008 年中国の村上チルドレンと村上春樹小説の「家族の不在」；

衛慧 2000 年中国で発禁『上海ベイビー』私が書いた；文芸春秋 78（10）

渡辺淳一（恋愛の毛沢東）我が「エロスと体験」を衛慧（中国の発禁作家）と上海で語る；現代 38（8）；講談社

陳卉 2004 年論ポストマダン小説の中の“孤独”感

陳卉 2004 年论后现代小说中的“孤独”情结；《甘肃高师学报》

丁琪 2004 年消費主義下にいる弱い失語者—『ノルウェイの森』の直子から『上海ベイビー』の天天まで

丁琪 2004 年消费喧哗中脆弱的失语者——从《挪威的森林》中的直子到《上海宝贝》中的天天；《内蒙古大学学报》

呉雨平 2010 年語境、身分、表現——村上春樹と衛慧の代表作への解読

（吴雨平 2010 年语境、身份、表现——对村上春树和卫慧代表作的解读；《文艺争鸣》；《文艺争鸣》杂志社

孫小芳 2017 年我国女性文学創作の特徴及び現状——『上海ベイビー』を例として

孙小芳 2017 年我国女性文学创作特征及现状——以《上海宝贝》为例；《语文建设》；语言文字报刊社

彭敏 2015 年多角度から衛慧小説への解読

彭敏 2015 年多维角度下卫慧小说解读；南昌大学硕士毕业论文